

# 天地

ネットワークテーブル 559号

天地シニアネットワーク 2024. 9. 16

TENTI TODAY (イトーヨーカ堂とセブンイレブン)		1
会員の広場 (受信メール)		2
報告	生成 AI による原稿作成の試み	臺 一郎 3
歴史	「了解日本(日本を知る)」(24) 10, 外来文明の三部作(4)「日本の未来」	愈 彭年 5
歴史	E・ライシャワーの日本昭和史(4)	津田 孚人 9
事務局		1 2

\*\*\*\*\*

## TENTI TODA

\*\*\*\*\*

夜、散歩に出ると、ペットの散歩に出合います。日中、蝉や鳥の鳴き声も全く聞こえなくなりました。厳しい暑さに参っているのは人間だけではなさそうです。暑さ寒さも彼岸まで、あと少しの辛抱です

\*\*\*\*\*

「生成 AI」という文字を新聞紙上に見ない日がないくらい、「生成 AI」が流行語になっています。日常生活を送る上で、非常に影響力がありそうです。事の正否について賛否両論あるようですが、臺(うてな)さんが「生成 AI」とは如何なものか?を知る上で大変参考になるレポート、「生成 AI による原稿作成の試み」を、寄稿してくれました。後掲3ページに掲載してありますので、是非ご一読してみてください。

\*\*\*\*\*

午前中は、米大リーグの大谷選手、夕方は大相撲、夜はプロ野球と、一日中スポーツ番組がありますので、TVを見る時間が長くなります。クーラーに当たりっぱなしで、体調がいま一です。

\*\*\*\*\*

アメリカは大統領選挙、日本も自民党総裁選挙、立憲民主党の代表選挙と、政治の世界は選挙一色です。しかし、どのTV局も同じような報道をするので、関心が薄れます。日本の政治家の場合、発言への「責任」が感じられないのが残念です。政治家だけでなく、伝える報道側も同じ「結果」と「責任」をはっきりさせないと、困ります。

\*\*\*\*\*

円相場が急騰し、株式市場は乱高、日本経済の先行き見通しが難しくなりました。根源は、米国の大統領選挙、米国・国内の景気動向と金利、など米国要因ですので、円高は、しばらく続きそうです。円安を理由に製・商品価格を上げた企業は、円高になって価格を戻す(下げる)、・・・難しそうです。円安で増えた外人旅行客も急激な落ち込みはなさそうです。国内景気は、好景気をつづけそうです。

\*\*\*\*\*

関心をもって見続けているのですが、日銀の国債大量保有が、投機資金の動きを鈍くしているようです。投機資金による売買でも、売買ですから相手があり、売場合は現物、買う場合は現金が必要です。大口の場合、だいたい他から借りてきます。日本では、大量に貸し借りできる対象は、国債か投信、そして現金です。現在、国債も、投信も日銀が、大量に保有しています。日銀は、大口の貸し出しはしないでしょ。人間社会では、思惑、投機が認められ、一方的にならないようにという天の配慮があります。経済活動を活発にするには、弾力性が必要です。

\*\*\*\*\*

### イトーヨーカ堂とセブンイレブン

スーパーのイトーヨーカ堂が全国にある126店舗のうちの33店舗を減らすというニュースがでました。ヨーカ堂も・・・とマイナスに受け取る向きが多いようですが、長崎屋、ダイエーとは、事情が違うように思えます。創業者の伊藤さんは、金融機関から借り入れで店舗を開設する方針をとりませんでした。かわりに地主にヨーカ堂仕様の店舗を作ってもらい、長期(知るところでは20年)に借り受けました。保証金が必要ですが、所有するより負担が軽く、また金融機関に余計な配慮をしなくて済みました。したがって期限がくれば、状況次第で、店舗の継続、廃止が可能でした。

顧客を第一にして市場調査を十分にし、商品管理を徹底して、経費を抑え、高収益会社になりました。かつて柏に住み鎌倉に引っ越した知り合いが、柏とくらべると、こちらのヨーカ堂の商品の質が高く、価格も違つとぼやいていたのを覚えています。

今回、閉鎖される店舗、ほとんどオーナー所有のようです。業界の環境が厳しいので、契約期限が来たところで解約、というケースが多いのではないのでしょうか。次の展開をどうするか・・・検討中なのではないのでしょうか。

セブンイレブンが東京証券取引所に、昭和50年代後半、イトーヨーカ堂の10年ほどあとでした。コンビニエンスストアは未だ日本ではほとんど認知されておらず、代表(社長)の鈴木さんの店舗展開は、慎重でした。7-11の店舗は、酒屋からの転向が多かったようですが、オーナー(酒屋主人)を店主にして商品の供給、管理は7-11が行う、という方式でした。オーナー(店主)には一定の所得保証をするので、マニュアル教育を徹底して行っていました。新規店舗開設にあたっては、市場調査を十分に行い、店舗間の距離をとって、商圈を定めていたようです。最初の頃の話ですが、台東区の鳥越神社に近い知り合いの酒屋さんが、大通りから少し入っているために、7-11の店舗になれなかった、という話を聞きました。

また、商品についても一流メーカー品を定価で売り、スーパーの薄利多売戦法と一線を画していました。

グループの体制が変わりましたが、最近、7-11ホールディングスをカナダの企業が買収したいというニュースが流れました。近年、7-11の店舗がやたらに増えました。駅の周辺に3つも4つもあつたり、住宅街にあつたり、ビックリさせられます。また、低価格商品も増え、かつてのセブンらしさが薄くなりました。支払いのキャッシュレスは当然としても、無愛想な店員が、多いのも気になります。我々が知る7-11は、なくなりました。買収される7-11は、別物のようです。

\*\*\*\*\*

## 会員の広場

\*\*\*\*\*

### 受信メール

毎号楽しみに読ませていただいています。執筆のみなさん、私よりご高齢ですのに瑞々しい文章を綴られて、特に 7 月号をもって終了された宮川さんの若々しい文章そして絶え間ない好奇心、戦中戦後の描写など随分勉強させていただきました。またライシャワーさんのお話はあらためて勉強させていただきます。ありがとうございました。(石塚さん)

\*\*\*\*\*

最近、温暖化問題や脱原発問題に首を突っ込んでいます。高齢者でもできること考え、実行しています。とくに、温暖化問題は本気で取り組まなければ、日本も完全に蒸し暑い亜熱帯、いや熱帯になってしまうでしょう。(志賀さん)

\*\*\*\*\*

## 生成 AI による原稿作成の試み

臺 一郎 (75 歳)

今年になって最新の人工知能である生成 AI がしばしば話題になっている。話題や関心の主たる対象は、一体どんな活動に使えるのかとか、どんな職業の人が仕事を失うのかなどである。また生成 AI の利用分野や利用頻度が増えるのに連れて、データセンター需要の急増 ⇒ データセンターで使われる特殊な半導体需要の急増 ⇒ データセンターや半導体工場の立地増加が引き起こす電力受給の逼迫なども問題や課題としてメディア報道を賑わしている。

さて、そもそも生成 AI とはなんなのか、一般人の生活にも影響するものなのか、具体的にどんな効用があるのかなどを知りたいと思い、生成 AI の基礎的な知識が書かれた本を買ってみた。けれども例によって、IT 系の書籍はカタカナ英語のテクニカルタームがやたらと多いし、本の著者である AI 専門家にとっては当たり前の常識が、筆者のような IT 音痴の老人には良くわからない。結局最後まで読む気にはならなかった。なので例え基礎的なことでも、技術的な原理や特徴等の理解は諦めることにした。むしろ実際に使ってみることで少しは理解が深まるかもしれないと考えた。筆者の買った本には、生成 AI の活用分野の一つに文章作成があると書いてあったので、実際に原稿をテスト的に作成させてみることにした。

原稿の作成テストに使用した生成 AI は、マイクロソフト社が開発した AI アシスタント機能 COPILOT だ。マイクロソフト社の Web 検索サイト“MSN”で興味のあることなどを検索していたら、検索窓の右端に COPILOT という虹色のメビウスの輪みたいなマークがあった。「はて、これはなんだ」と思いながらクリックしてみると、どうやら生成 AI による検索というかチャット(おしゃべり?)機能みたいなものだとわかった。

早速「10 年後の海上自衛隊潜水艦の性能を大胆に予測せよ」とか、「10 年後の電気自動車のバッテリーを予測せよ」などと要求してみたら、反応というか回答がなかなか面白かった。そこで、自分にとって何か実用的な使い道はないかと考えてみたら、「そうだ天地ネットワークの原稿作成などに使えないか」との言葉が頭に閃いた。そこでさっそく原稿作成のテストを試してみた。

生成 AI では、先ず「何をして欲しい」とか、「何をこういう形でせよ」という要求や指示を打ち込む必要がある。これをプロンプトという。このプロンプトが不明確、或いは曖昧だと、生成 AI の回答というか出力も満足のいかないものになる。

そこで今回のテストでは、プロンプトとして先ず「明治の元勲伊藤博文の人物紹介文を 400 字程度で作成せよ」との要求を試してみた。そして伊藤博文の人物紹介の文章を生成 AI が作成してきたら、次いで「前記の文章を英訳せよ」と要求してみた。

伊藤博文の人物紹介原稿は、最近天地ネットワークで筆者が自身で作成し投稿したばかりなので、AI が返してくる回答に大きな誤りがあれば直ぐにわかるという理由から選んだ。また、英語はどんなレベルの英語を書くのかに興味があったし、もし筆者でもわかるような英語なら、フェースブック投稿等で海外向けに英語で投稿したいときなどに使えるかなと思ったからだ。

## テスト結果

**プロンプト:** 伊藤博文の人物紹介文を 400 字前後で作成せよ

**AI の回答:**

伊藤博文(1841-1909)は、日本の初代内閣総理大臣であり、明治時代の政治家として重要な役割を果たしました。彼は貧しい農家の出身でありながら、松下村塾で吉田松陰に学び、尊皇攘夷運動に参加しました。その後、イギリスに留学し、帰国後は明治政府の中核で活躍しました。

伊藤は大日本帝国憲法の制定に尽力し、アジア初の近代的な憲法を作り上げました。また、彼は 4 度にわたり内閣総理大臣を務め、立憲政友会の初代総裁としても知られています。

性格は陽気で人当たりが良く、庶民的な感覚を持ち続けたと言われています。しかし、韓国統監としての活動中に安重根によって暗殺され、その生涯を閉じました。

伊藤博文は、日本の近代化と立憲政治の確立に大きく貢献した人物として、今なお高く評価されています。

**プロンプト:** 上記の伊藤博文の人物紹介文を英訳せよ。

**AI の回答:**

Hirobumi Ito (1841-1909) was Japan's first Prime Minister and a key political figure during the Meiji era. Born into a poor farming family, he studied under Yoshida Shoin at the Shoka Sonjuku and participated in the Sonnō Jōi movement. After studying in the UK, he returned to Japan and played a central role in the Meiji government. Ito was instrumental in drafting the Constitution of the Empire of Japan, creating Asia's first modern constitution. He served as Prime Minister four times and was the first president of the Rikken Seiyūkai party.

Known for his cheerful personality and approachable demeanor, he maintained a connection with the common people.

However, his life was cut short when he was assassinated by An Jung-geun while serving as Resident-General of Korea. Ito is highly regarded for his significant contributions to Japan's modernization and the establishment of constitutional government.

以上二つのプロンプトに対する AI からの回答に要した時間は、いずれも 2 ~ 3 分。予想したより遙かに早かった。筆者が自身で同じ事を行ったら、日本語文の作成だけで校正や修正まで含めると 30 分以上はかかるだろう。さらに英訳となったら、英語は得意でないから、和英辞典などを引き引きして、下手したら 60 分以上を要し、且つかなりお粗末な英文になりそうだ。

生成AIの回答は誰かが書いたものをネット上から探してきて、それをそっくり表示しているわけではない。先ずはその文章や回答を作成するのに必要なデータをあちこちから探してきて、それらを文章として組み立てているらしい。つまり文を書いているのは機械というかプログラムだから、まるっきり同じ文章は無い筈で、著作権なども問題にならないようだ。筆者は句読点ひとつ直していない。いじったのは改行を数カ所入れただけだ。生成AIの回答文は改行無しのべた打ちからだ。日本文としては素直で読みやすく、不自然さのない文章だ。誰も生成AIの作文だとは思わないだろう。

今回はテスト利用だが、本番で使う場合は文章丸ごとをAIで作成するのではなく、AI作成文に加筆したり、削減したり、書き直したりしてから投稿するのが良いだろう。最近堀江貴文（ホリエモン）氏の書いた「ホリエモンの日本改造論」という本を読んだ。堀江氏によると、原稿は相当部分を生成AIで作成し、それをホリエモンが加筆・修正して仕上げたという。目次には「AIテクノロジーで変革する日本」という章もあるが、その原稿もAIを活用して書いたに違いない。原稿作成時間を大幅に短縮できたそうだ。

無駄のない効率的で合理的なやり方が好きな堀江氏らしい。但し、「だったら本代をもっと安くして」とのセリフが頭をかすめた。プロとして文章を書く人は、「実はこれは生成AIで書いた原稿がベースなのです」などとは言わない方が良いだろう。原稿のありがたみが薄れる感じがしないでもない。ITに強い人や効率性や合理性を重視する頭の良い人は、文章作成などに際して、既に生成AIを結構な頻度で使い始めているのではないだろうか。（完）

\*\*\*\*\*

## 「了解日本」(「日本を知る」(第25回)

愈彭年 (87歳)

### 10. 外来文明の三部作(4)

### 12. 日本の未来

新華社通信は、鳩山由紀夫首相は2010年1月4日、首相官邸で新年記者会見を開き、「より対等な日米同盟関係の実現に努め、双方の協力レベルを高める」と述べたと伝えた。また、鳩山首相は同日、内閣府で2010年初の記者会見を開き、米国との関係について言及し、両国関係が「より開放的で率直でありたい」と述べた。

AP通信は、この言葉は日本が米国とのより対等な二国間関係を求めていることを示していると分析している。

鳩山首相の民主党は2009年9月の政権発足以来、何度も米日関係を対等にし、アジア、中国に接近することを表明してきた。野党自民党や一部では、民主党や鳩山内閣の対外方針が日米同盟関係を危うくし、日本の利益を損なうと非難している。

民主党が日米関係を対等にしようとする主張は、戦後日本史上、政府方針として初めて提起されたものであり、実現するかどうかは別として、提起すること自体に大きな意義がある。民主党も日本社会の主流であり、日本共産党や社民党ほど社会の少数ではないからだ。だからこれは日本社会の主流の変化を意味し、彼らは従属的な地位から抜け出し、自立的な道を歩むことを求め始めた。

20世紀に入ってから80年代初期に、日本は米国に次ぐ世界第2の経済大国となり、1868年の明治維新以降、西洋を学び、西洋を追い越して国を近代化するという悲願を果たした。

日本国内ではすぐに「私たち日本は今後誰に学ぶのか」という論調が出てきた。これから我々の先生は誰だろうか。私たちの先生はまだいますか。日本はもうこれらを手に入れた、これ以上学ぶことはない、世界にはもう日本を教えることができる先生はいない。

つまり欧米文明の学習と吸収の段階は終わり、日本は独立自主的に日本文明を創建する新たな段階に入る。「憧憬—恐れ—吸収—嫌悪—拒絶」の公式で言えば「吸収」段階は終わり、「嫌悪」の段階に入り始める。これは日本が独自の道を切り開くということだ。

アメリカ文明の特徴の一つは大量生産、大量消費、大量浪費である。科学技術の日進月歩の発展が媒介になって生産と消費が互いに促進し合い、生産と消費の量と規模が拡大する結果は、製品、資源とエネルギーの驚くべき浪費につながる。

しかも人々は簡単に何かを生産することが可能で、物が無限にあると錯覚し、恣意的に物を台無しにして、物を無駄にし、浪費する極めて悪い習慣を身につけた。

日本は米国文明のこのような特徴を受け入れた結果、物を大切にし、エネルギーを節約する良い習慣を徐々に捨て去り、過剰に消費し、無駄遣いに浪費する悪い習慣が身についた。

工業化の急速な進展に伴い、1950年代末から大気汚染、水質汚染、土壌汚染、悪臭、酸性雨、光化学スモッグなどの各種公害が発生し、さらにイタイタイ病（鉱山廃水中のカドミウムによる中毒症、骨軟化症に似ており、わずかな刺激で骨折し、日夜痛みが生じる）、水俣病（工場廃液中の有機水銀による中毒症、言語と聴力障害、精神異常が発生し、重症者が死亡する）、慢性ヒ素中毒症、慢性気管支炎、気管支喘息、喘息性気管支炎、肺気腫などの公害疾患を引き起こし、環境と生態が破壊された。

日本政府は1967年8月に「公害対策基本法」を急遽施行し、企業、国家、地方政府の公害防止に関する責任、義務と対策を明確にし、全体的に公害対策を推進し、国民の健康と生活環境を保護し、大気汚染、水汚染、騒音、振動、悪臭、地面沈下、土壌汚染など7種類を代表的な公害として指定した。

さらに、環境基準を制定し、国と地方政府が実施する公害防止事業の費用の全部または一部を企業が負担することを規定した。また、企業の廃棄物処理に関する責任と義務を規定し、公害紛争処理と損害救済を明確にした。

1973年に環境庁は初めて「緑の全国調査」（正式名称は「自然環境保全基礎調査」）を実施した。動植物、地形、地質、生態系などを対象に森林、河川、湖沼、海岸などの状況を調査し、保全用基礎資料を収集した。その後5年ごとに「緑の国情調査」が行われ、現在に至っている。

1988年に特定物資の規制などによるオゾン層の保護法、1993年に絶滅危険種の保存法、1993年に環境保護大法「環境基本法」、1994年に「環境基本法」に基づく「環境基本計画」、1997年に地球温暖化防止京都会議に積極的に参加し「京都議定書」を制定、2001年に特定製品のフロンガスの回収と廃棄などに関する法律の確保実施などを制定した。

日本は痛ましい教訓を積極的に吸収し、さまざまな対策を真剣に取り組み、公害防止、資源節約、省エネルギー排出削減、環境保護、生態保護の道を歩み、そのための新技術と新装備に関する研究開発を積極的に行い、現在、日本の環境保護技術とその製品は世界のトップにランクされている。

これらの動きは、米国の工業文明の弊害から抜け出して独自の道を切り開くことを意味するのだろうか。知識経済、循環経済、低炭素経済、さまざまな新概念の出現はまさに模索の前進の表れだろう。

アメリカ文明に憧れ、吸収してきた日本の学校教育における様々な問題も次々と露呈している。そのため、日本国内では学校教育の改革をめぐる激しい論争が続いている。

教育の大法である「教育基本法」を改正するかどうか、どのように改正するか、個性と知育に偏った米国学教育をどのように扱うか、「公共の精神」と「愛郷愛国心」をどのようにとらえて、育成するか、義務教育費の負担問題、学習指導要領改正問題、学制 6・3 制の多様化問題、学力低下問題、教育能力不足教員の処遇問題、入学式と卒業式に国旗掲揚問題入学式や卒業式での国歌斉唱や登校拒否、学生が授業の秩序を破壊して教師に授業をさせない問題、同級生のいじめ、自殺などの問題を引き起こすなど、問題は山積みであり、政治的な問題となることもある。

最近では「活力がなく、感動がなく、関心がない」ことを特徴とする「草食男子」（「草食系男子」の略称）も登場しており、日本の心理学者岸田秀氏は彼らが生活に特別な要求はなく、ひたすら穏やかに暮らしたいと願う一群の男子青年であると分析している。

彼らは出世したくなくて、生活に目標と計画がなくて、責任感に欠けて、性欲が減退して、女性を喜ばせる気がなくて、無知と道徳の欠如を恥じないで、信仰がなくて執着しない。そして無関心にこの世に直面して、酒を飲まないで酔態がなくて、ごく少数の親友と付き合っ、生身の人を回避する。

岸田秀はこれが別の日本の危機だと驚きを示した。これらもまたアメリカ文明を取り入れた日本の教育が行き詰まりを迎え、進路を変えて新たな道を切り開くことを意味することなのだろうか。

国内外でこれほど多くの問題に直面している日本がこれまでのように前に進むことができるだろうか。日本国内では、これまで日本には 2 つの重要な局面があった。

1 つは明治維新、もう 1 つは第 2 次世界大戦で日本が降伏したこと。現在は第 3 度目の「平成維新」と呼ぶ（平成は現在の年号、平成元年は 1989 年）局面を迎えている。

様々な兆候は日本が大改革をし、新しい道を模索することを示している。では、未来の行方はどうだろうか。2010 年 5 月 13 日付日本経済新聞社のウェブサイトには、「NOVA 英会話学校が終わり、GEOS 英会話学校の生徒はごくわずか——日本人は英語をやめたのか？」「日本の経済と技術は成り立たない」時代は終わった、といった標題を書いた郷好文の一節がある。

低成長時代に入り、海外に学び直す時期にあり、人やモノや文化の出入り口から活路を見出そうとしている時期だ。国内に隠れて世界に出ないことは、百年後の国の衰退をもたらすだろう。

『文明の衝突』の著者である米国の政治学者、故ハーディングトン教授は、1998年12月に日本の東京で講演を行った。テーマは『日本の21世紀における選択—世界政治の再編』である。ハーディングトン教授は、文化と文明の観点から日本の特徴を分析し、列挙した。

第一に、文化と文明の観点から見ると、日本は孤立した国である。日本文明は日本の一国だけに属しており、日本は他の国と文明的に密接な関係はない。

第二に、日本は最も早く近代化に成功した最も重要な非西欧諸国だが、自分の基本的な価値観、生活様式、人間関係、行動規範などを西欧化していない。

第三に、日本の近代化実現は、革命の揺れを経験したことがなく、伝統文化上の統一性を維持したままである。日本の近代化は、明治維新と米軍占領の2つの改革で進められた。

第四に、他の国と文化的なつながりがないため、日本には個々の難題と機会がある。つまり、日本が危機に直面したときに文化的に共通性のある国の支援を得られない、当然日本にも文化的な共通性のある他の国を支援する責任はない。日本は自分の権益を勝手に追求することができる。

第五に、今後数年間で世界は支配的な西欧文明、西欧文明に挑戦するイスラム文明、中国文明に分裂する。現在、日本は西欧と一緒にいるが、この状況は今後も続くのだろうか。中国経済が発展し続ければ、中国の政治的影響力と軍事力も成長し続けるだろう。他の国とは文化的なつながりがないため、国家権益が発生すると、日本は中国の復興に対してはばかることなく好意的に反応するだろう。

ハーディングトン教授は、国際関係の理論から言えば、新興勢力に対しては「勢力均衡の維持」対策をとるか、それに「追従」する対策をとるかの2つの状況があると分析している。

日本が100年前に世界の舞台に出て以来とってきた外交戦略は追随戦略で、実力のある大国と同盟を結ぶことだった。第一次世界大戦前は大英帝国と同盟を結び、1920年代と30年代はファシズム強国と同盟を結び、第二次世界大戦後は、米国と同盟を結んだ。

東アジアの主要地域で中国が大国として台頭し、米国が世界の超大国の地位を維持するとき、日本は中国、米国の比較研究をしなければならなくなる。日本は、まずその選択を避けるであろうが、米国が最終的に唯一の超大国の地位を失う時には、日本は中国と手を組む可能性が高い。

ハーディングトン教授の言う「選択を避ける」とは、どのように理解しているのだろうか。それは中米両国に偏らず、中立を保ち自主的な道を歩むということ。自主の道を歩む日本に対して、周辺国の中で日本を最も恐れているのは何国だろうか。筆者はアメリカだと思っていた。

第二次世界大戦中に日本海軍を撃破し消滅させたのはアメリカであり、フィリピン、沖縄、グアム、硫黄島、サイパン、ガダルカナル島などで日本駐留軍を消滅させたのもアメリカであり、広島と長崎に原爆を落としたのもアメリカであり、軍隊を派遣して日本列島を占領したのもアメリカであり、戦時中に日系アメリカ人とアメリカ在住の日本人を収容所に追い込んだのもアメリカである。アメリカは日本に民主と自由をもたらし、日本の経済回復と発展を助けたが、機会があれば日本人は報復すると、心の中で恐れていた。

ロシアについてはどうだろうか。日本人はロシアに恨みを持ち、第二次世界大戦末、ソ連赤軍は中国東北部に進出して日本の関東軍を撃破し、多くの捕虜をシベリ

アに連れて行って苦役に従事させ、その間に多くの死者が出た。現在でも領土問題は解決していない。(日本では北方領土問題と称している)

日本はこれまで他の周辺国を見下していたが、中国だけが最近急速に発展したために、両国の関係が縦の上下関係から横の水平関係に転化し、これまでの見下ろしの心理がなくなって、敬意の念が増してきている。しかし、心理状態は、いまだ順調ではない。

ハーディング教授の言う「選択を避ける」時間はどれくらい続くのだろうか。彼の分析では、米国が世界唯一の超大国の地位を失い、中国が発展を続け、政治、経済、軍事上の強国になって米国を逆転する、としている。

中国は最近、政治的影響力、経済的競争力、道義的カリスマ及びイメージ的親和性を強化することを提案している。日本はアメリカ文明から中国の中華新文明に転換できるのか。中華の新文明は日本に魅力を感じさせることができるのか？

ハーディング教授は、日本は中国と「手を取り合う」べきであり、経済的、政治的な手を取り合う。中国は、文明的に日本を引き付けなければならない。中国は伝統的な中華文明の基礎の上で人類の先進文明を吸収し、そして中国の特色ある社会主義の実践を理論化し、中華の新文明を総合的に革新しなければならないと述べている。

2011年6月

\*\*\*\*\*

#### E・ライシャワーの日本昭和史(4)

津田 孚人(87歳)

参:「ライシャワーの昭和史・ジョージ・R・パッカー著・森山直美訳、講談社」

エドウィンがハーバードに入学し、中国語を学び始めた1931年当時、中国語の辞書は、1874年に編纂され、1909年に改訂版が出たS・ウェルズ・ウィリアムズ編纂の辞書しかなかった。さらに、内容は役立つどころか読むほどにわからなくなる代物だった。一番単純な漢字でも、どれが主な語意で、どれが珍しい用法であるか不明で、ただやたらに幾つかの意味を並べているだけだった。

困ったエドウィンは、漢字1つにつき、3×5インチのカードを作り、表側に漢字を書き、裏側にウィリアムズの辞書にある複数の意味をタイプした。そして翻訳側を上にして、テキスト順に並べ、無限にある可能性を懸命に考え、文脈に合いそうな意味を拾い出していった。

このおかげでたくさんの漢字を覚え、日本文を読む力も養うことが出来た。日本語の話し言葉と中国語の勉強で習得した漢字の知識を合わせて、日本文を読む力を身につけていった。

しかし、彼自身が望むほどには中国語や日本語を流暢に話せるようにはならなかった。東京で過ごした少年時代に、基礎的な日本語の話し言葉と、電車の行き先や商店の看板などに使われている漢字は身につけた。後になって、円仁(慈覚大師)に関する博士論文執筆のために古典中国語と学術的な日本語を学ぶことになるが、日常会話と、学術研究という両極端のあいだにある膨大な領域—つまり、普通の日常会話やスラングやジョーク、それに日本の生活で使われる冗談—は、教わることも、経験することもなかった。

1961年、大使として東京に赴任するとすぐに、日本語の新聞をすらすら読めるにもかかわらず、日本語でのスピーチや、公務はしないと宣言している。

いまの学生であれば、最初から、電子辞書を持っており、翻訳つきの文章をただちにコンピューター画面に出せる。発音は視聴覚装置を使って教えて貰える。中国語

の四声の訓練は、中国語のネイティブ・スピーカーが吹き込んだボイスレコーダーを使って受けられる。生徒の関心とモチベーションを高める手段として、中国語や日本語のテレビもある。中国に1～2年滞在して、地元の文化に没入する”イマージョン”によって中国語の勉強をする機会を得ているアメリカの学生も少なくない。

エドウィンは、1932年夏、ハーバードの中国研究セミナーに受講登録する。ロックフェラー財団の資金で設立された同セミナーの指導教授は、同大学における日本および中国美術史の先駆者、ラングドン・ウオーナーと、かつて中国で勤務していた宣教師、アーサー・W・ハメルで、ハメルは初期の中国史を教えた。

このセミナーで終生の友となる、二人の熱心な日本研究者、ヒュー・ボートンと、チャールズ・バートン・ファーズと知りあう。ボートンは、その後、コロンビア大学の日本研究の祖として輝かしい名声を得、ファーズは、ロックフェラー財団に勤めたのち、ライシャワー大使の文化公使となっている。1941年に日本との戦争が始まるまで、外交官をのぞくと専門的な日本研究者は、ボートン、ファーズ、エドウィン、の3名のほか、2、3人いるだけだった。

大学院生になったとき、エドウィンは、当時、西欧で最高の日本研究者ではないか、と言われたセルゲイ・エリセーエフに出会う。エリセーエフは、サンクトペテルブルクのデパートを有する資産家の家に生まれ、1908年に来日、東京帝国大学に入学した。

日本語をマスターし、芭蕉についての研究論文を日本語で書き、日本文学過程をトップに近い成績で卒業した。ロシアへ帰国したが、ロシア革命で資産と将来を奪われ、フィンランド、フランスと逃亡生活を送り、ソルボンヌで教職についた。1932年、ハーバード大学から1年間の客員教授に任命され、そのとき、エドウィン・ライシャワーは、彼に出会った。エドウィンは、彼を<アメリカの日本研究の父>と高く評価した。

1933年の春、修士号を受けたエドウィンにたいして、エリセーエフは、博士号取得をめざして、5年間海外で研究をしてはどうかと提案した。まず、パリで2年、それから日本と中国で3年間勉強した後ハーバードに戻り、博士号を得て極東言語学部で教える、という内容だった。

エドウィンは、1931年、大學を出て就職を考えたが、大恐慌のあとで、希望していた国際関係のキャリアが得られず、このチャンスに飛びついた。2年間のパリでの留学では、ソルボンヌ大学での講義を受けられる程度のフランス語を独学で学び、ドイツ語、ロシア語を受講した。そして各地を旅行し、美術館、聖堂、オペラを堪能、外国文化に自由に触れる時を大いに楽しんだ。

このとき、オバーリンで1年下で同じくパリへ留学していたエイドリアン・ダントンと出会い、婚約した。彼女の両親は、1917年から1927年まで北京の精華大学で教師をしており、6歳から16歳まで北京で暮らした彼女は、きれいな発音の中国語を話すことが出来た。二人は、1935年、東京で結婚式をあげた。

エドウィン・ライシャワーのパリでの東アジア史研究者としての成果はあまりなかったが、1934年にフランス文学研究のためにパリに来ていた日本人・前田陽一と知りあい、終生の友を得た。陽一の父、前田多門がエドウィンの父親の友人であった。前田陽一は、その後東京大学の教授になり、義理の息子、入江昭は、ハーバード大学でエドウィンの下で博士論文のための研究に従事し、ハーバード大学の傑出した歴史家となった。

エドウィンは、博士論文を書くために、セミナーを受講したことも、教授の指導を受けたこともなく、事実上独学であった。しかし、ヨーロッパで過ごした時間は無駄では

なかった。オーストリア系アメリカ人3世として、故郷に戻ったような懐かしさを覚え、歴史、芸術、建築を楽々と、また熱心に吸収した。

ヨーロッパ滞在は、若いアメリカの歴史家に、多くのアジア専門家にはない視座を与えた。同時代、および古代の両方について、ヨーロッパ、日本、中国を比較的にとらえるという視座である。

北ヨーロッパの国々は、その面積と歴史の古さの点で「アメリカよりも」日本に似ており、ヨーロッパ全体に一ちょうど中国や日本と同じように一過去が重くのしかかっている。当時、東アジアと似て、ヨーロッパでは国内の不穏状態と各国間の抗争が深刻だったが、アメリカでは事情が異なり恐慌がアメリカ人を第一次世界大戦後の孤立主義へ逆戻りさせていた。

エドウィンは、西洋の全く異なった二つのところから東アジアを見る事が出来るので、同時代の大方の研究者よりも広い視野を得られるのだと実感していた。それはちょうど、専門化が進む今日、中国と日本の両方を研究するという得がたい贅沢を許されているおかげで、相互関係をよりはっきりと見る視点を得ることが出来る、に相通じるところがあった。

彼は、世界史に於いて、古代中国と日本の文明を、少なくともギリシャとローマの文明と同じほど、意義深く重要なものとみた。封建制度の研究に、このような比較の手法をとった研究者は、日本にも、それ以外にもまだいなかった。

それまでの学者は、日本を文明の周辺に押し込めていた。より優れていて支配的な中国文化の支流にある小さな離れ島、エクゾチックで特異な島、という扱いでしかなかった。西欧の学者が、本格的な研究に値するものとして日本史を扱ったのは、エドウィンが初めてであった。

1935年(昭和10年)の春、エドウィン・ライシャワーは、シベリアを横断して日本へ向かった。その先、2年間、大学院で学ぶための資金は、ハーバード・イエンチン研究所からの援助で確保してあった。両親と婚約者のエイドリアンが東京で彼を待っていた。

ライシャワーは、フランス、ドイツ、オーストリアで不吉な政治的混乱を目の当たりにした。暴動を見、街頭でも、警察による残虐行為があいついでいた。彼はベルリンでナチスの旗に敬意を表するドイツの学生たちに反感を覚えた。しかし、まさか日本で騒然たる日が待ち受けているとは夢にも思っていなかった。1920年代に成長した日本のひ弱な民主主義は、それからの2年間に急速に軍国主義と、ファシズムに傾いていった。

東京での8年ぶりの再会、両親は喜び、エイドリアン・ダントンの結婚は、7月5日、東京の区役所で行われた。両親は軽井沢に帰り、緊迫した異国文化の中で新婚生活が始まったが、エイドリアンは申し分なく新生活に適していた。彼女は、漢字が読めるので日本語の読解力が進み、日本美術の勉強を始めて美術史にかんする日本語文献の英訳をはじめた。彼女は、ラドクリフ大学で美術の学位をとっていた。

日本は、1933年に国際連盟を脱退、そして1937年7月に盧溝橋事件が発生し、45年の戦争終結まで絶え間ない戦争に突入していった。日本の大学は、ナショナリストの熱狂に席捲された。

1935年、ハーバードで知りあった、ボートン、ファーズ、エドウィンの3人は、東京帝国大学への入学を希望し出願した。当時大学は、同大学でもっとも影響力のある憲法学者の一人、美濃部達吉教授が、右翼知識人の攻撃の的となっていた。「天皇の役割は、憲法に定義されているがゆえに、天皇は国家の外部と上部に立つ正当性の聖なる源ではなく、国家構造内の一機関である」とする彼の天皇機関説が問

題にされていた。

学内が沸騰していたそのときに、エドウィン・ライシャワーは、入学をはたした。ハーバードの恩師、エリセーエフ教授の紹介状が功を奏して「どちらかといえば保守的で国家主義的な文学部日本史科の長」である辻善之助教授の、特別研究生として受け入れられた。「知る限り、そのとき大学で唯一人の西洋人の学生だった」と、エドウィンは後に語った。

緊張した気運にある日本社会であったが、1930年代半ばに、西洋人の大学院生が東京帝国大学で学ぶ日々は、それなりに安全なものだった。国が、知らぬ間に戦争に滑り込み、政界や実業界の要人が右翼狂信派に暗殺されていても、日本の一般市民たちは白人の外国人に対しておおむね礼儀正しさを保っていた。

だが、日本政府のエージェントは、外国人居住者の活動に眼を光らせていた。親友のボートンは、東アジアを回って東京までの旅の間、日本人スパイにつけられていた。さらに、日本人と競う立場にある専門家のアメリカ人は、日本でやっていくのが段々難しくなっていた。

東京生まれで完全なバイリンガルだったハーバート・ボウルズ博士、アメリカで医学と手術の実習を受けて聖路加病院のスタッフに任命され、熟練した外科医として東京に戻ったが、あるとき、手術の最中、彼が頼んだ手術用の器具を、日本人看護婦が上司の指令で手渡しを拒否、立ち往生する事件が発生した。

しかし、ボートンは仲間の学生たちとの個人的なつきあいでは、敵意はほとんど感じなかった、個人的に嫌がらせを受けたことはなく、東京での生活は極めて快適だった、と報告している。

ボートンは、ライシャワーの指導教授だった東京帝国大学の辻善之助教授とこんな会話を交わしていた。「日本語を一部しか話せない外国人が日本史を専攻するのは僭越だと思いませんか」と聞いたときに、辻は「外国人であるあなたには、私には書くことができないような日本史を書くことができるはずです。他のことを気にせず、自分の計画通りに進めるべきです」。

辻の云わんとしていたことは、1945年より前に、日本の歴史家がつきつけられた「神道の神話」。国定日本史観は、ヒロヒト(昭和天皇)にいたるまで、万世一代の天皇の祖とされる天照大神から始まる。この神話に疑いをはさむものは不敬罪の対象になりかねない。これに異議を唱える歴史家とマルクス主義者は、厳しく罰せられた。

こうした状況があったゆえに、1945年の敗戦後、天皇が「人間宣言」をしたときには、何世紀ものあいだ、暗愚のままにおかれた国民の歴史を、日本人も外国人も同じく、初めて書ける「白紙状態」が存在した。

ボートンやライシャワーのような歴史家にとっては、先駆者を務める機会となり、日本の学者たちは、事実を照らして新しい解釈や学説を試すことができる自由を得た。  
(つづく)

\*\*\*\*\*

## 事務局

\*\*\*\*\*

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

住所：〒116-0001 荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス: [tentisenior06@gmail.com](mailto:tentisenior06@gmail.com)

電話(携帯): 090-2534-1316